武者小路実篤と『白樺』の仲間たち、そして理想郷「新しき村」の人々が理想と文学への熱い想いをこめて世に送った雑誌『生長する星の群』。

復刻版

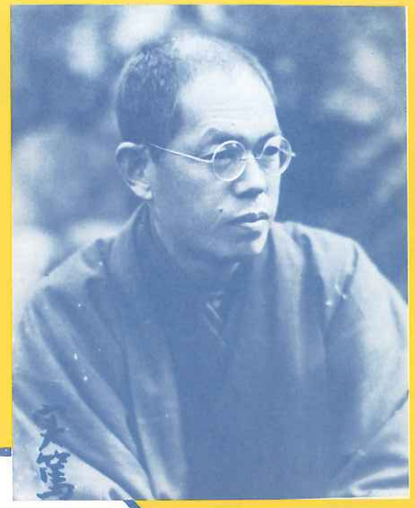
生長する星の群

全10巻
別冊1

村の機関誌『新しき村』と合併・改題した後の『人間生活』もあわせて復刻！

概要――A5判・上製・四、九一四ページ／本体揃価格――一四〇、〇〇〇円

不二出版



実篤という大山脈を知る手掛りに

今井　信雄

『生長する星の群』（以下『星の群』と略記）は、姉妹誌『新しき村』（大正期）に雁行して、一九二一（大正一〇）年に創刊。さらに三年後の二四年一月号から両誌は合併して『人間生活』となったが、同年の十・十一月合併号を最後に廃刊となっている。

『星の群』から『人間生活』の廃刊に至る約三年半に亘る期間は、武者小路の生涯を左右する多端な時期だった。村に住む同志四十名の生活を支え、理想の村の実現を期しての施設資金の捻出には、評判の速筆ぶりを発揮して膨大な原稿を書きつぎ、一方、人類のための浄財集めには、考えられる限りの手立てを次々に講じて倦まなかった。

新聞種になった離婚と再婚問題も、正直で大らかで懐の深い対応を示し、大震災では生家が焼かれ、『白樺』を廃刊に追いこみ、村の印刷所曠野社関係の借材を背負いこむなど、数々の打撃を被りながらも挫折することはなかった。

〈個性〉という言葉に特別な意味と響きをもたらしたのは『白樺』だが、別けてもその中にあって、大山脈を形成しているのは武者小路実篤である。この山脈の襞々を解明する手掛りは、『白樺』『新しき村』『星の群』『人間生活』で、以下、武者小路の関係した諸雑誌が続く。このうち『白樺』は既に二書店から復刻版が出ており、『新しき村』（大正期）も、先頃不二出版の手によって復刻され、次いで今度は『星の群』と『人間生活』が出ると聞く。国会図書館でも二誌の全貌に接し得られない今日、研究者にとって、またとない朗報といわねばなるまい。（いまい・のぶお　成城短大名誉教授）

『白樺』衛星誌のひとつとして

紅野　敏郎

『生長する星の群』、その巻号をひきついだ改題の『人間生活』。ともに武者小路実篤その人の体臭と全面にかかわる誌名である。『生長する星の群』全三十冊は、『白樺』末期に『白樺』及び『新しき村』と雁行して創刊、最後の一冊（合併号）のみが関東大震災による『白樺』の廃刊後に出されている。『人間生活』はその翌年に九冊刊行。

私は約三十年前、岩波書店の『文学』誌上で『白樺』周辺誌の一つとしてそれらをも含めた一文を草したことがある。『白樺』百六十冊とともにあわせ見るべき雑誌として著名。とくに日向の『新しき村』とともに東京の曠野社の実体を見きわめるのに有益。『白樺』関係者若干（表紙を描いた岸田劉生・有島武郎・長与善郎・千家元麿・犬養健・宮崎丈二・高村光太郎）のほか武者小路を信じて集まった周辺人物（長島豊太郎・永島直昭・川島伝吉・外村完二・永見七郎・木村荘五らや石山徹郎・大熊信行ら）の仕事のありようもこれを繰ることによって明らかになる。「ドストエーフスキイ記念号」はじめ舟木重信のゲーテ、有島武郎のホイットマン、高村光太郎のヴェルヘーレン、片山敏彦のユゴー、木村荘五のガルシンなどの翻訳に力を入れているのも特色の一つである。

二、三種の実物を照合しての復刻が原則。当時から今日に至るまで探索の熱意さえあれば、若干の二、三を除けば、それほど入手困難ではないが、休刊があったり、合併号があったり、奥付けと表紙の巻号表記が一致しない号があったりし、その経緯は厄介。刊行中の小学館版『武者小路実篤全集』においてもフルに活用した。（こうの・としろう　早稲田大学教授）

『生長する星の群』の心の叫び

渡辺　貫二

『生長する星の群』は一九二一年四月に創刊号を出した。『新しき村』創刊後三年足らずの時で、以後「新しき村」運動の両輪の形をなしたものである。

実篤は「発刊の言葉」の中で「この雑誌によつて自分達は正しい人間、正しい生活、正しい精神、正しい仕事、正しい行為、正しい喜びを讃美しやうと思ふ」と書いた。

雑誌『新しき村』はどうしても「新しき村」建設のための機関誌の役目が重視される。しかし村の理想に共鳴して集まった人々は、内外ともに現実家である以上に理想家であった。それらの人々の、人間的要求、芸術的欲求は強烈であった。

若くて内面的要求の強い人々、生長する星々の溢れ、湧き上る創造力を自由に発表できる新しい雑誌発刊の必要を実篤は痛感したにちがいない。それがこの『生長する星の群』の発刊である。

現実の「新しき村」の建設と、「新しき村」の一人一人の生長は新しき村運動の両面であり、一つのものであった。私たちは今改めて、当時の若き星々の燃える情熱をここにさながらに見ることができると思う。

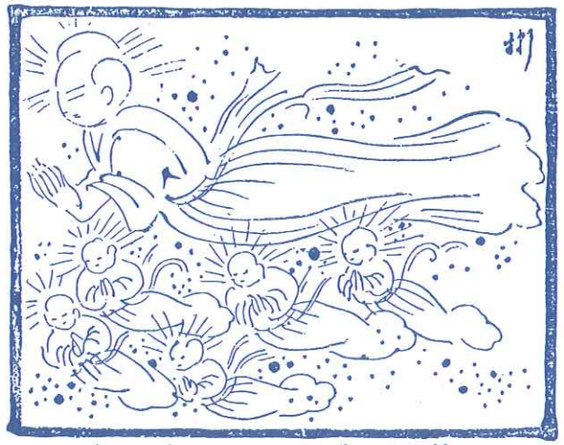
（わたなべ・かんじ　財団法人新しき村理事長）

◎武者小路実篤関連年表

一八八五年・(明治18)東京に生まれる
一九〇六年・学習院高等科卒業、東京帝国大学入学
一九一〇年・有島武郎らと『白樺』創刊
一九一一年・岸田劉生との交流始まる
一九一八年・(大正7)宮崎県日向に「新しき村」を建設。
機関誌『新しき村』創刊
一九二〇年・「新しき村」印刷所・曠野社開設
一九二一年・曠野社より『生長する星の群』創刊
一九二二年・長与善郎、訪村
一九二三年・有島武郎自殺
・『白樺』廃刊
一九二四年・『生長する星の群』、『新しき村』と合併し、『人間生活』と改題。一一月をもって廃刊
・志賀直哉・長与善郎・倉田百三らと『不二』創刊
一九二五年・離村。村外会員になる
一九二六年・『ひ・新しき村』創刊
一九二七年・(昭和2)『大調和』創刊
一九二八年・『独立人』創刊
一九二九年・岸田劉生死去
一九三一年・『星雲』創刊
一九三二年・長与善郎と二人雑誌『重光』創刊
一九三九年・埼玉県毛呂山町に東の「新しき村」創設
一九四一年・新しき村機関誌『馬鈴薯』創刊
一九七六年・死去

写真＝上段右より・改題誌『人間生活』表紙・王家元磨・鎌倉の長与家別荘にて＝左から実篤、園池公致、長与善郎、長与茂子、岸田劉生
下段・一九二五年頃の日向「新しき村」

詩三篇



星の群　清宮彬

宮崎丈二

ある秋の日の散歩

街の雜沓に押し流され
さびしさを感じながら
自分は靜かな堀のほとり
柳の並木が廣い道を縁（ふち）とり
對岸の高い石垣の上には
老ひたる松が悠々と生きてゐるほとり
漸く魂を靜め自然をたのしむことが出來るところへ
　出た
空は一体に曇つてゐるけれど
底鄰やかしく

◎復刻版『生長する星の群』概要

『生長する星の群』全三〇冊・
改題誌『人間生活』全九冊を合本し復刻

主宰——武者小路実篤
発行——一九二一（大正一〇）年四月～一九二四年一一月
概要——A5判・上製・四、九一四ページ
解説——田中榮一（新潟大学教授）
本体揃価格——一四〇、〇〇〇円（分売不可）

◇配本概要

	●復刻版巻数	●発行年月日	
第一回	第一巻	大正一〇年四～六月	一九八九年九月
	第二巻	七～九月	四二、〇〇〇円
	第三巻	一〇～一二月	
第二回	第四巻	大正一一年一～三月	一九九〇年一月
	第五巻	四～七月	四二、〇〇〇円
	第六巻	八～一二月	
第三回	第七巻	大正一二年一～五月	一九九〇年四月
	第八巻	六～一二月	五六、〇〇〇円
	第九巻*	大正一三年一～四月	
	第一〇巻*	五～一一月	
	別冊	解説・総目次・索引	

（別冊のみ分売可＝本体価格一、〇〇〇円）
＊誌名は改題され『人間生活』となる

◎関連図書〈復刻版〉ご案内

新しき村　全六巻・別冊一

本誌は、一九一八（大正七）年、宮崎県日向にうちたてられた理想郷＝「新しき村」の機関誌である。武者小路実篤が高く掲げた理想と実践の記録として、白樺派運動の実像を照らし出す重要資料である。

武者小路実篤＝主宰
一九一八（大正七）年七月～一九二三（大正一二）年一二月
A5判・上製・
総三、三三四ページ
別冊＝解説（大津山国夫）・総目次・索引
本体揃価格＝七五、〇〇〇円
別冊のみ分売可＝一、〇〇〇円

不二出版
東京都文京区向丘一—二—一二
TEL　〇三（八一二）四四三三
FAX　〇三（八一二）四四六四
振替　〈東京〉六—九四〇八四

○本カタログ中の表示価格は全て消費税を含んでおりません。